

あそ

5

2011



明治神宮



玉ひとつ湖水にあまる花火かな

恩田秋夫の 一茶俳句切手

一茶

玉一つ湖水にあまる花火哉
大花火角田河原はあの当り
べそべそと花火過けり角田川
無縁寺の鐘も聞へて大花火
大それた花火の音も祭哉
一しめり花火のきげんよかりけり
世につれて花火の玉も大きいぞ
そよ風の稲葉見よとて花火哉
川舟や花火の夜も花火売
小花火やされど崩る、橋の人
其次もくしくぢり花火かな
大名の花火そしるや江戸の口
手まくらに花火のどうんく哉
どをんだんどんとしくじり花火哉
膝の子や線香花火に手をたたく
一文の花火も玉やく哉
大雨の御礼花火や除地川原

この切手シートには十枚の八〇円切手と二枚の切手より大ぶりの板画で構成されてゐる。今月はその二枚の内の一枚。一茶の花火の句を集めてみました。花火は江戸時代から“どん”と鳴るらしい。

あそ

五月



洋 髪

冬ごもり笑む人形のまたゑめり
洋髪の寫眞の母の隣かな
春のやや万象に名を付けゆく
花ひらくやうに言葉をふやすや
入口のほかは出られずかすむ塔

本町三 佐藤喜孝

⊕

ちらちらと窓辺の白く二月尽
春暁余震に目覚む昨日今日
到来の菠薐草の濃き緑
無駄づかひ買ひ占めもせず春なかば
濃き紅に染まりて浮かぶ花桃苑

東大宮 山莊慶子

⊕

早春の天空にせし飛翔かな
雛まつりゑがほいろある子等と
宙天をゆるりゆるりと靡く春
椿一花のせて古池静まれり
幾たびも忿怒をつつむ春衣

鍋屋横丁 吉弘恭子

春遠し

未曾有の津波伴ひ春の地震
雪の中静まり返る湯沢町
散財も一助なるべし鰻酒
節電の町に冬星煌めけり
三月のじりじりと過ぐ無力なり

清瀬 赤座典子

⊕

剪定ののちの小鳥の落ちつかぬ
おむすびと偕老語る春の月
停電の壇に湯を入れ春炬燵
目も鼻もやられてばかり三月尽
雪柳吹かれ語れる物語

聖蹟桜ヶ丘 安部里子

⊕

「お元気で」一言ありぬ暖し
雪解水遊行柳にとどきけり
世論とはアラビヤ数字四月馬鹿
のどけしや昼寝に地球の廻る音
雪どけの水に色あり水墨画

曳舟 遠藤実

⊕

ひと株の水仙残す瀬戸の庭
雀来て蹴散らしてゆく春の雪
春寒し決めかねてゐる服の色
大仏に春日やうやく訪づれぬ
思案して傘持って出る春の空

逗子 鎌倉喜久恵

東日本大震災

川崎・小田栄 木村茂登子

三月十一日海牙を剥き爪を立て
明日は死ぬ身かもしれない桜餅
泥じみの証書も形見卒業す
白木蓮美しすぎる今年かな
祈れども陸奥に春遠き日日

⊕

梅一枝届けて雛に呼ばれけり
沈丁花相合傘に肩濡らす
背濡らし差しかける傘蓬摘
携帯で夫と繋がる春の月
兄と行く昔語りの春の土手

白金 斉藤裕子

大地震

京橋 篠田純子

三月は無かったことに四月馬鹿
諸葛菜心の余震収まらず
春の蚊が余震の中を飛んでゐる
放射能飛びはじめたるおぼろかな
空中にいろんな物質春の雨

⊕

水仙は話合ひをり揺れてをり
水仙のしきりにこぼす日のかけら
ひな祭古くならずに九十才
耳朵になほ鼓の響く花月夜
なのはなののはなばかりゆめさみし

千駄木 芝 尚子

⊕

行きずりの背に落ちたる紅椿
大地震身を寄せ合ひて寒に耐ふ
震災の不安の日日に桜咲き
輪になって不安の背中寒つる
大地震行きずりの人暖かく

宝泉寺前 芝宮須磨子

雁 一 縷

どうしても零るる黄な粉うぐひす餅
午後五時をお報らせします暮れかねて
屋上の吏員その時蜃気楼
暮れのこるかに春宵の浮燈台
雁一縷帰るバス待つ列にゐて

劔地東出^{つぎひだり} 定梶じよう

⊕

唐突に低く飛び行く黄蝶かな
小説の中に恋して春燈
頬杖の江戸の石仏落椿
ミモザ咲く昨日は今日を知らざりし
三月十一日想定外と言ふなかれ

所 沢 須賀敏子

柴 犬

表面をつくろふことも春の鬱
蒸鱗うすももいろの骨すこし
柴犬の鼻の濡れいろ二月尽
ラグビーの勝者のひとり号泣す
校庭の低い鉄棒走り梅雨

浦 和 竹内弘子

東北関東大地震

春の空痛し大津波の襲ふ
家族みな無事です辛夷かがやけり
声きけて嬉しと泣けり春夕焼
春寒し汚染の水道水を飲む
春キャベツ妊婦乳飲み子汚すまじ

田 端 田中藤穂

春の雪

春雪の乱舞に身柄預けたり
ふうはりと窓に寄り来る名残雪
窓開けて雪舞ふ春を惜しみけり
だるまにはなれずに解けし春の雪
春の地震信号すべて赤となる

三 光 坂 東 亜 未

冴 返 る

サイレンに遠吠響く冬の夜
うす赤み黄みどりへ蛇穴が出る
無慙なる災害ニュース春一番
胸が潰れるニュースばかりよ黄水仙
方丈記まさに今記す春の地震

富 田 長崎桂子

⊕

しづかな日馬酔木の花の揺れおもし
白木蓮晴れぬ心にひらきけり
をしみなき剪定の音余震あり
三月の新聞おもく束ねをり
思ふこと多き日々なりヒヤシンス

大 宮 早崎泰江

⊕

東京の雪ふるさとへ電話する
春の雪斜めななめに線をひく
卒業や力を籠めて少女泣く
春惨景テレビ画面のしたたかに
飲める水飲めない水と春ともし

河 田 町 堀内一郎

天災・人災

精霊や陰と陽もつ春の海
落ちる物棚から下ろし弥生尽
声高に安全を言ふ四月馬鹿
染井吉野御触を出すは悪代官
春霞レゴ遊びめくループ橋

落 合 森 理 和



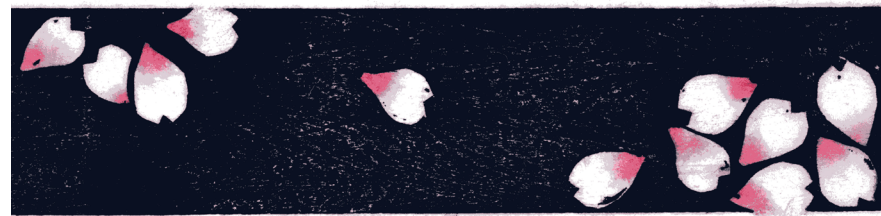
前月作品

時流る和音のやうに春ともし	篠田純子
冬たんぽぽ米寿となりし誕生日	芝宮須磨子
時計の鳩鳴きに出てきて日脚伸ぶ	定梶じょう
綿雪やふいの別離を受入れず	須賀敏子
返り血の一点もなき障子かな	竹内弘子
口に出しもうすぐ春と言ってみる	田中藤穂
水琴窟宇宙に響く冬の朝	續木文子
白い息ワッと言つてゐるかたち	東亜未
見ゆる物皆ゆつくりと牡丹雪	長崎桂子
玻璃ごしの浮雲一つ冬ごもり	早崎泰江
東京に雪を降らしめ無帽なり	堀内一郎

喜孝 抄

一人一句

梅花よりちいさく紅い鳥を飼ふ	佐藤喜孝
雪原にぽつと人影ふはと消ゆ	森理和
過ぎし日や一片残る冬紅葉	山莊慶子
氷上の真ん中にゐて静かなり	吉成美代子
やはらかく噛みてひとひのさくら餅	吉弘恭子
携帯の高笑ひに鴨泳ぎ寄る	赤座典子
年賀状思はぬ人にいただきぬ	安部里子
蟪蛄の卵をつけて山椿	遠藤実
冬帽子かすめて鳥とび去りぬ	鎌倉喜久恵
春風駘蕩巡る鶴見の七福神	木村茂登子
じつくりと子の言ひ分を春隣	齊藤裕子



雪原にぽつと人影ふはと消ゆ

森 理 和

「ぽつと」「つ」は小さい「つ」ではなく、直音の「つ」でしょう。漢字では「点」と書くようです。なにしろ、文語では促音の「っ」は大文字で書きます、なんて迷信がゆきわたっていますので、大文字の「つ」なのか小文字なのか吟味が必要で、不便なことです。そもそも仮名遣いは、便宜のためにある筈のものなのですが。

さて以上はさし置いて。はるかに人影が点と現れる、それが雪原であるだけに衝動的。それかあらぬか、その影がふわりと消えたという。「ぽつ」と「ふは」の硬軟の対比。副詞や形容詞はなるべく遣わぬように、なんて常識を足蹴にするような句、と言えましようか。

まだ海は鉛の重さ黄水仙

吉成美代子

日々見る冬の海はまさに鉛色。そして冒頭の「まだ」は「春になつてもまだ」の意。しかし確実に春がやってきていることは、黄水仙で知れる。海(う)なものの暗と水仙の明。

かばかりの寺の銀杏朝日受く

吉弘恭子

「かばかり」は、どちらかと言えばネガティブに使う言葉ですから、境内に生る銀杏が少ないのでしょう。朝日に映えて黄いろくかがやく。

「かばかりのぎんなん」だから面白い。すずなりだったなら常識的。そこに俳句の芸がある。

涅槃会の朝莊嚴春の雪

木村茂登子

朝の雪は、そうでなくとも辺りを莊嚴する。涅槃の雪となればなおさら。

ビブラフォンの桴も弾んで春隣

斉藤裕子

待春の一景。ビブラフォンや木琴は、メロディ楽器でありながら打楽器でもある。だから人の情意に訴えるちからが他の楽器より強い、ともいわれる。だからこそ春近しの景によく似合う。人の句に手を入れること慎みたいと思うのですが敢て。上句の「の」は不要、「桴が」とするところですが。

面白い。下五から上五へ、ことばが返るのです。常識的な作り手(私のような)でしたら、結局の始末に困惑しているところでしょう。

東京に雪を降らしめ無帽なり

堀内 一郎

「雪を降らしめ」から座五「無帽なり」に言葉が遷つてゆくところ、うまい。そして、それ以上にうまいと思うのが「降らしめ」。

映画、テレビでおなじみの景。といえは、そつけない鑑賞になってしましますが、弘子さんは「一点もなき」と表現なさっている。

むかし、友人が動脈を切ってしまったて、血が量や障子に大量に飛んだことがあります。後日障子を貼りがえる時、友人がつくづく見たら、とんだ血が点々としか付いていない。友人は思ったそうです、映画はうそだ。

返り血の一点もなき障子かな

竹内 弘子

寒椿心に支へ欲しき日の

田中 藤穂

「欲しき日の」で終る、大胆といつていい措辞が

「船走らせて」と表現して、見ている人がそうさせたわけではない、「鶯を鳴かせて」と言つて鶯に命令したわけではない、ということなのでしょう。

若人の俳句を注意して読んでみて下さい。古い新しいということではなく、確かに違ってきているのです。

扨て、雪国の私のところでは、無帽に降雪はうつとういだけですが、東京ではむしろさわやかに感ずる。掲句にはそんな趣がある。

それもこれも、「雪を降らしめ」の措辞にあると思うのです。



吟行案内

東京の麦畑

日時 六月某日

集合場所 未定

申込先 3371-4623 (佐藤喜孝)

矢切の渡し

日時 七月三十日(土) 十一時

集合場所 北総電鉄「矢切」駅

予定コース 矢切駅↓野菊の墓文学碑

↓矢切の渡し↓柴又帝釈天↓京成「柴又」

駅

参加希望者は七月十五日までご連絡ください。
佐藤喜孝

近世俳諧と漢詩文

四二

王 岩

緑槐高処

はつせみや笛に袋を十文字

其 角

其角(一六六一〜一七〇七)、江戸前期の俳人。芭蕉の高弟。一六六一年七月に江戸に生まれる。母方の姓は榎本。のちに宝井氏を名乗る。俳号は宝晋斎など。十四、一頃芭蕉の門に入る。性、豪放闊達、大の酒好きであつた。蕉門の十哲の一人。撰『虚栗』『花摘』『枯尾華』などがある。自選発句集『五元集』がある。其角の逸話として赤穂浪士討ち入り前夜、四十七義士の一人の大高源五と日本橋で出合い、はなむけに「年の瀬や水の流れと人の身は」と詠んだ。これに対して俳句を嗜んだ源五は「あした待たるるその宝船」と返して、討ち入り決行を仄めかしたとされる。

前掲の句は其角の自選集『五元集』に典故。句題の「緑槐高処」は宋の蘇東坡の「溪陰堂」詩に由来するものである。

白水満時双鷺下、
 白水満る時 双鷺下る
 緑槐高処一蟬吟。
 緑槐高き処 一蟬吟ず
 酒醒門外三竿日、
 酒は醒む門外 三竿の日
 臥看溪南十畝陰。
 臥して看る溪南 十畝の陰

其角は蘇詩の承句「緑槐高処一蟬吟」を「緑槐高処」に短縮して、自句の句題として用いた。省略された「一蟬吟」は句中に「初蟬や」として姿を現した。蘇詩は昨夜の酒から醒めた後の所見を詠んだ。同じく酒好きな其角は恐らくこの酒酔いから醒めた清々しい気持ちに同感を覚えて、蘇詩の文字を借りて句を詠んだであろう。

今年も初蟬の季節が来た。朝夕の涼しげなその鳴き声が笛の音色より美しく聞こえ、もう笛の出番は無くなった。それで、その笛を袋に入れてすっかり縛った。さあ、その初蟬の鳴き声をたつぷり楽しみたまえ。



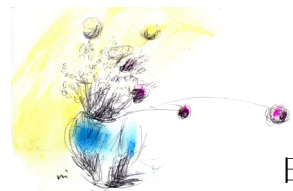
其角（夏の句）

きぬぎぬの用意か月に時鳥
 夢にくる母をかへすか郭公
 葉に成て画れぬ梅や郭公
 越後屋にきぬさく音や衣更
 いにしへのならのみやこの牡丹持
 桐の花新渡の鸚鵡不言
 早乙女に足あらはるゝ嬉しさよ
 汁鍋に笠のしつくや早苗取
 さみたれや富士の煙の其後は
 五月雨や傘につる小人形
 さみたれや酒匂てくさる初茄子
 銭湯を沼になしたる菖かな
 藻の花や金魚にかゝるいよ簾
 交代の葉守の神や初柏

かたつぷり酒の肴に這せけり
 鎌倉やむかしの角の蝸牛
 瓜むいて猿にくはするあつさ哉
 せみ啼や木のほりしたる団うり
 夕立にひとり外見る女かな
 夕立や田を見めくりの神ならば
 芋のはに命をつゝむし水哉
 夕かほや白き鶏垣根より
 切れたる夢は誠か蚤の跡
 此人数舟なればこそすゝみ哉
 千人か手を欄干や橋すゝみ
 酒ほかす舟をうらやむ涼み哉
 是や皆雨を聞人下すゝみ
 舷を玉子てたゝくすゝみ哉
 筆をさす御笠やかろき下涼
 舜や扇のほねを垣根哉

あをかき集

田中藤穂選



栈橋のほかに人居ぬ夏の島

あめんぼに石のちいさな太鼓橋

荷となりし傘を凭せる春の山

とどまりし橋うごきだす花いかだ

春の雲三步でわたる螢橋

花の雲ちいさく橋のかゝりをり

バス停に橋の名つづく花の雨

佐藤 喜孝

つくしんば線路の脇に二三日

内裏様の絵は一つだけ貝合

さみどりの菜飯を供へ雛納

七珍の大和しじみの粒揃ひ

塔婆持つ孫の成長春彼岸

一族の集りやすき春彼岸

おさがりの少し乾いた牡丹餅

幾万の人柱立つ涅槃西風

マイクロかミリかは知らぬ春埃

まんさくの花の終りの余震かな

八卦見の視線をそらす柳の芽

六本木ヒルズ風に腰引けり

堂守の軀の揉み手梅咲けり

春寒し人感知して灯しけり

春うらら裏木戸少し開けたまま

篠田 純子

木村茂登子

遠藤 実

躓けるやうに蝶蝶は花移り

武蔵野の月が育てし金闕や

遠柳風のかたちになつてゐる

百薬の長に目刺のひと焙り

ジューパンの長短干され山笑ふ

そう云へば孕みし鯨食べた日や

白こぶし空の青さに涙せり

単一の品切れ続く白辛夷

日没にカフェを閉ず日々目刺焼く

棚にカップ戻さぬままに初桜

軽やかにぽかぽかぽかと春の雪

反射光手にうすら氷の留まらず

非日常が日常となる寄居虫^{がうな}かな

街道に車少なし花李

北国の球児澆刺春日浴ぶ

森 理和

赤座 典子

復活の公演選ぶ草の餅

春光や母の見守る一輪車

ゆきし影水尾ひくやうに薄紅梅

よごれたる両手さし出すさくら受く

逝きし人を忘れてしまふ寒紅梅

女坂こえてたんぽぽいぬふぐり

梅ヶ香やじはりじはりと六腑まで

傾ぐ地球春の大地を震撼す

猫の恋早足はやあしばかりかな

軽やかに大地を割りてクロッカス

花鳥を大きなレンズで待ちにけり

いぬふぐり自在に生きる様に見せ

沈丁や豆煮て心落ち着かせ

大津波去りし大地に梅生きる

地震の揺れ忘れられずに辛夷咲く

吉弘 恭子

須賀 敏子

水仙を生けて精出す一日かな

長崎 桂子

雪解水増し川岸の色めける

朝市に大小不揃春山菜

穂の芽や柔らかな日の朝の市

啓蟄や歩行を誘ふびら多し

列島の惨を増し春雪積む

春眠を促してゐる額の夫

芝 尚子

沈丁の薔びつしり立ち止る

身ほとりの明るさ願ふ福寿草

春は玻璃に三月の雨静かなり

佳句後言

風流な句です。バス停に橋の名がつづくというのは、バスは川に沿って走っているのか、それとも川を幾つも越えてゆくのでしょうか。橋の名をききたくなります。折しも桜の季節、それにしつとりと雨が降っている。どこか旅先の一句でしょうか。落着いた気分が伝わってきます。

搭婆持つ孫の成長春彼岸

茂登子

お孫さんを含めた家族で、お彼岸のお墓参りにい

らしたのでしよう。そして今年は孫が自分から搭婆を持つて、お墓まで運んでくれたのでしよう。去年より背丈も伸び、肩幅もがっちりして、そして何より心が大人になって……。それを嬉しく満ち足りた思いで見ている作者。

武蔵野の月がそだてし金蘭や

実

日本の雑木林に自生する黄色の小さな花、その何気なくつつましく咲く金蘭を、武蔵野の月が育てたという壮大な発想は素晴らしい。『が』という発音を俳句では嫌うことが多いが、この句の場合は力強さが感じられ、武蔵野の月という広大な言葉を受けるのにふさわしく思われる。

百薬の長に目刺のひと焙り

〃

百薬の長、勿論お酒です。これから一献傾けるのに、目刺をさつと焙つて、とまことにさらつとした一句ですが、味わいはなかなか深い。ひと焙りがま

棧橋の他に人居ぬ夏の島

喜孝

どこかの小さな離島の実景でしょうか。とても淋しい気がします。与謝野大臣が、高齢化少子化は世界的な問題だとおっしゃっていました。が、実景からいرونなことに思いが拡がります。

バス停に橋の名つづく花の雨

〃

た心憎い。世上雑然とした今、この心境にあやかりたいと思います。

単一の品切れ続く白辛夷

理和

三月十一日の東北の大地震のあと、東京のスーパーから、見事になくなったものは、パン・米・水・トイレットペーパー・そして電池でした。一週間ほどで徐々に平常に戻りましたが、久しぶりに戦争の時のような非常時を感じました。

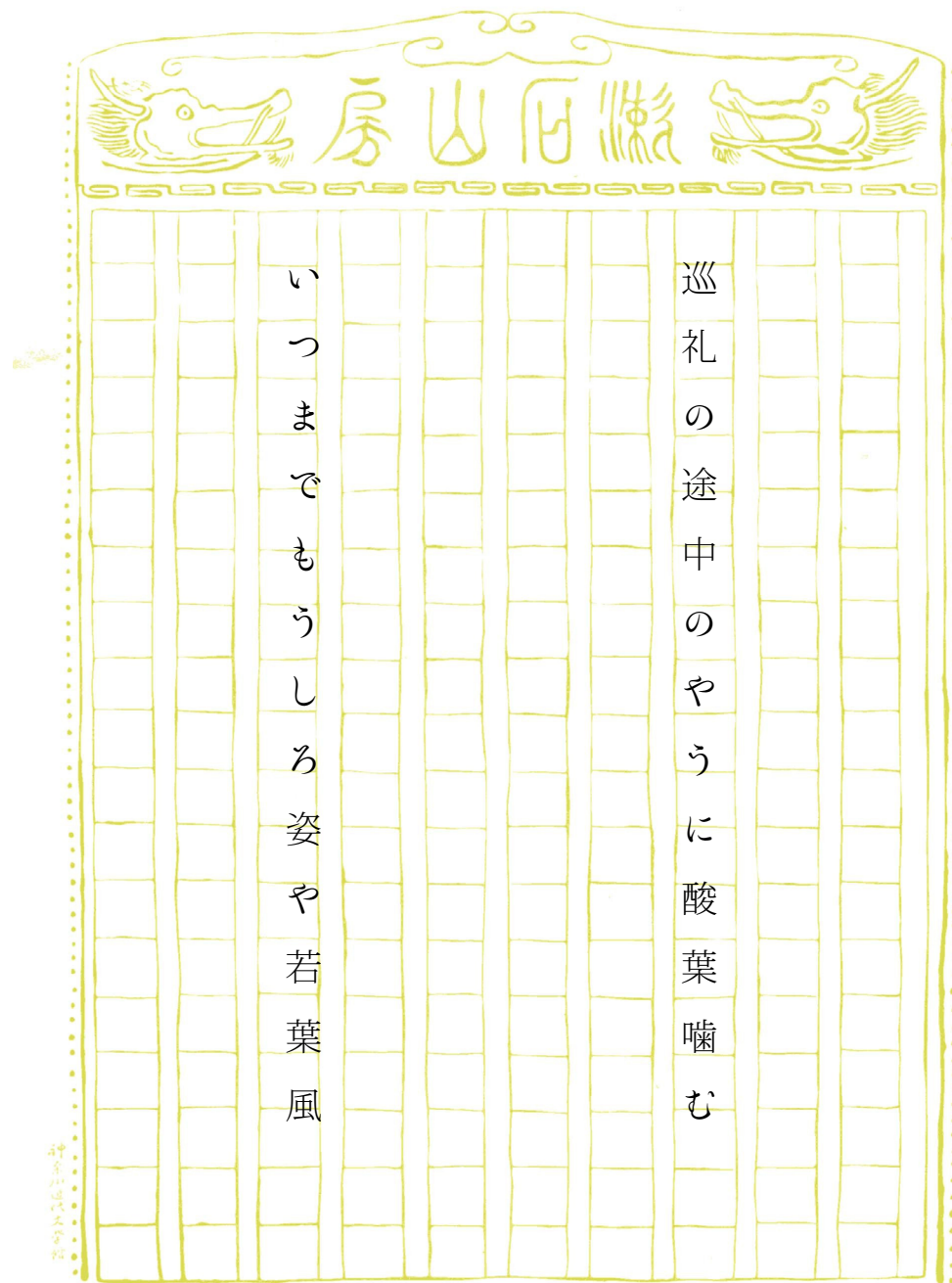
辛夷の花が真っ白に咲いている頃でした。

北国の球児澆刺春日浴ぶ

典子

これは先日の全国高校野球大会の時、大地震大津波におそわれた東北の高校球児の代表が、堂々と健気にプレイした様子を詠まれたものと思います。とても感動的でした。

句も明るくて、みて元気の湧いてくる佳句だと思います。東北の復興をお祈り致します。



あを柳集

兼題 葉

佐藤喜孝 選

今月の「葉」は今年の御題を拝借した。お歌会では左記の歌などがあつた。

白樺の若葉をぬらす昼しぐれ書き出さむわがことば立ちくる	篠 弘
草の葉の切れ端のこるシャワー室妻は夏日の草を刈りしか	岡本 義明
ささやかな悲しみあれば水底に木の葉が届くまで待ちぬたり	上田 真司
「大丈夫」この言葉だけ言ふ君の不安を最初に気づいてあげたい	西 春花

巡礼の途中のやうに酸葉囃む

酸葉は別名、ギシギシ・スカンポ。私の中では『酸模（すかんぼ）の咲く頃』や父の幼い時の話しの中に登場するおなじみの草であるが、実際に「これだ」と指をさす自信がない。ちなみに北原白秋の詩は一番だけで二番はない。

土手のすかんぽ、ジャワ更紗

昼は蛭が、ねんねする

僕ら小学尋常科

今朝も通って、またもどる

すかんぽ、すかんぽ、川のふち

夏が来た来た、ドレミファソ

巡礼と遍路とは少し違ふイメージをいだく。酸葉を口にしたときの感覚に、巡礼のイメージが重なったのは柔軟な感覚のなせる技。「途中のやう」が寂しくて気に入つてゐる。

いつまでもうしろ姿や若葉風

いつまで見てもこちらを振り向かないといふ。絵の中の人もさうだし、思ひ出の中の人もさうだ。しかし作者はそれ以上は望んではゐない。これはこれでよいのだと思つてゐるやうだ。若葉風がこのように句を暗くしてはゐないところは私には持ち合はせてゐない羨望の世界だ。

題詠「葉」（順不同）

足許の落葉に混じるすがれ蜂

竹内 弘子

北面に年を重ねし冬紅葉

水木の葉あからみつつや母の忌来

巡礼の途中のやうに酸葉噛む

十日町六日町など黄葉晴

もみぢ山の後ろ八海山黒し

さなきだに殖ゑることなき木の葉髪

消火器を替へねばならぬ落葉かな

葉ぼたんに氷あづきのやうな雪

春の雨紫蘭の二葉出揃ひぬ

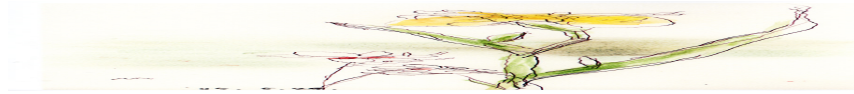
安部 里子

連翹の花を追ひかけ葉の少し

身ほとりや沈む松葉に浮く枯葉

吉弘 恭子

いつまでもうしろ姿や若葉風





吾が影をのこし黄蝶は葉のかげへ
葉隠れに蛇の鬚そつと花をつけ
葉のあはひ冬日まつすぐ射し入りし

よく動く緋鯉の渦に散り松葉

踵から海馬にとどく枯葉かな

煙るごと落葉松芽吹き鳥の声

緋毛氈葉ごといただく桜餅

姑も夫もをりし葉山の春の海

木木芽吹き葉を横たへし彼岸花

葉の色によき悪しきあり春景色

送迎のにぎやかな聲柿若葉

葉もれ日のつぶらな地面夏となり

富士山に銀葉をのせ地震鎮め

葉緑素入のガム買ふ夏はじめ

葉唐辛子賣が来し道掃ききよめ

田中 藤穂

長崎 桂子

佐藤 喜孝

三月の句会

傳

中野区・カフェ傳

白菜を抜きし凹みに小鳥ある

弘子

やはらかく噛みあふことも猫の親
雪柳猫の額といふところ

綾子

白きもの飛ばされてゆく二月かな
雪山となりても生きるものは生き

寒林

馬の尾の空打つ乱れ春の風

藤穂

高齡をすっかり忘れ土筆摘む
雛の日のひとりのお菜念入りに

実

大空襲この静かなる春の月
石碑に影うつす梅の花

喜久恵

春時雨露坐大佛の目に涙

父に似る眉長き人治蠶酒汲む

喜孝

呑助に肝吸の肝切らしたる藤

吸飲に古き水あり梅の影

恭子

臘梅や彼の家にみつく心地して

やはらかく舐みて噛むなり桜餅

文子

木蓮は白磁に活けて奥座敷
日だまりに頭並べて福寿草

突然に低く飛び行く黄蝶かな

敏子

小説の中で恋して夜半の春

春霞レゴ遊びめきループ橋

理和

歩くほどぼかばかと春の雪

のれそれは穴子の稚魚とや春の小鉢

典子

啓蟄やマイ箸に決む漆塗

制服の肩の硬張り新人生

茂登子

新しい傘さして出る春の雪

弾ませて青き踏みたり乳母車

敦子

犬ふぐりわれに先立ち影が踏む

梅一枝届けて雛に呼ばれたり

裕子

背濡らし差しかける傘蓬摘

古ひいな古くならずに九十才

尚子

水仙は話し合ふごと揺れてをり

調句会

浦和・岸町公民館

休会

七座句会

中野区・小川苑

休会

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森 理和
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
岸町公民館 竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜
小川苑 吉弘恭子
(090-9839-3943)

あとがき

今月から「あをかき集」は堀内一郎選から田中藤穂になります。選者のご苦勞は選者になつてみなければわからぬところがあるかと思ひます。選者へのお礼は佳句、力作句です。私を含め投句者の皆さん頑張りませう。一郎さん御苦勞様でした。藤穂さんよろしく願ひします。 前月抄は定梶じようさんの鑑賞文を読む前に抄してゐます。私は人に左右されやすい質なのでさうしてゐます。又結果を見る楽しみが倍加するからです。今月も幾句かかさなりうれしくなりました。鑑賞の中で「なにしろ、文語では促音の「つ」は大文字で書きます、なんて迷信がゆきわたっていますので、大文字の「つ」なのか小文字なのか吟味が必要で、不便なことです。そもそも仮名遣いは、便宜のためにある筈のものなのですから。」といふ件があります。私などはその迷信を鵜

呑みにしてゐましたので傍線の部分などを含め肩の力が抜ける感がありました。私は俳句と散文とで仮名遣を使ひ分けてきましたが、日本語を表記するのにどちらかに統一した方が潔いのではないと思ふやうになりました。付け焼刃の旧仮名遣なのでいつも馬脚を現します。

〈喜孝〉

二〇一一年五月号

発行日 五月二十一日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹僊

郵便振替 00130・655526(あを発行所)
会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
表紙・佐藤喜孝